

薩摩藩と諸儀礼

—有職故実の貴—

尚古集成館 館長 田 村 省 三

1. 鹿児島と能

江戸時代、能は幕府によって保護されていた。「文化果つる僻遠の地」であるはずの薩摩藩では、当時、千石という非常に高い石高で能役者を召し抱えていた。

加賀百万石に次いで、薩摩藩島津家は七十七万石といわれる。ただし正確には七十二万石で、その内、島津家本来の石高は六十万石である。これに近世の初めに薩摩藩が徳川幕府の許可を得て領有していた琉球王国の十二万石をあわせて、七十二万石としていた。その島津家本来の石高六十万石も、どの程度信用してよいものなのか定かではない。

島津家当主義久の時代、島津家には九州全域を制覇しようという勢いがあった。しかし大友宗麟が豊臣秀吉に援軍を要請した。その結果、義久は旧領の薩摩・大隈・日向に追われ、秀吉に降伏することとなった。秀吉に降伏したとはいえ、義久は秀吉に対して良い感情をもってはいない。そこで豊臣政権は義久の弟、義弘を取り込もうとした。六十万石とはその時に作られた数字である。すなわち、義弘を取り込む作戦のひとつとして、義久と同等の取り分である十万石を与えるために、名目上六十万石としたのである。こうして秀吉は、義弘を当主にした。「島津家六十万石」は、実高三十万石程度であったともいわれている。

関ヶ原合戦に出兵した薩摩藩の侍千二百人のうち、生還したのは八十数名程度であったといわれる。生存率は一割にも満たないということであるが、その恩賞として与えられた石高は五十から百万石であった。そのような時代に、能役者を千石で召し抱えるというのはどういった意味をもつのであろうか。

①『上井覚兼日記』にみる安土桃山時代の能役者

島津貴久、義久等に仕えた重臣上井覚兼が、1574（天正2）年から1586（同14）年に記した『上井覚兼日記』は、戦国時代の島津家を知る根本資料といわれている。これには、茶の湯、囲碁、蹴鞠、猿楽・能、風呂など当時の武将の日常生活をうかがえる記述がある。この中から今回はとくに能役者、能に関する部分をみていく。

(イ) シテ方一王大夫

シテ方一王大夫とは、1574（天正2）年、細川幽斎の斡旋により薩摩に入ったと思われる『丹後細川能番組』と『上井覚兼日記』の共に名前が見られる能役者である。そのほかにも堀池宗叱、堀池弥二郎、東寺ノ小四郎、入江権丞が両方の記録に登場する。つまり彼らは細川幽斎の元にあり、薩摩に入った能役者であるということになる。

「喜入季久譜中」

「正文在当当家」

至貴國池坊下向由候、被指華事譜代儀候、殊更當時無比類之旨、執沙汰候、此等之通、大守江御取成専一候、悉皆御入魂所仰候、恐々謹言、

「朱カキ」

「元龜三年秋」卯月七日

藤孝（花押）

（季久）

喜入攝津介殿

御宿所

「上包」

細川兵部大輔

喜入攝津介殿

藤孝

御宿所

（鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録後編』より）

これは1572（元龜3）年に、藤孝（細川幽斎）が、喜入攝津介（島津の家臣）に宛てた手紙である。ここには「池坊が薩摩に下って来ており、いまや花を生けることはどこの大名もやっていることなので、島津家へのとりなしをよろしく頼む」ということが書かれている。幽斎が能だけでなく生け花の師匠の斡旋など、京の文化の移入を仲介していたという様子がよくわかる資料である。

「正文在川野湘雪」

一、王雅樂先年御動座之刻、就忠節領知可遣之旨、度々石治少雖承候、明所依無之延引候、以右之筋目承候間、即田尻荒兵衛跡知無殘所申付候、此旨可被仰聞候、恐々謹言、

「朱カキ」

「文祿元年」

嶋修入道

七月廿九日

龍伯（花押）

幽齋老

人々御中

（鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録後編』より）

これは1592（文禄元）年、島津家当主義久が細川幽斎に宛てた手紙である。御動座とは貴い人が移動することをいい、ここにある「先年御動座」というのは、秀吉が薩摩征伐をしたときのことを指している。石治少というのは石田光成のことである。一王大夫という能役者が、先年の秀吉の島津征伐のときに能を演じて見せ、これが忠節であると功を賞し、空いた土地をやろうとしていることの報告が、ここに書かれている。これらから、幽斎が当時、政治向きはもちろんのこと、文化などあらゆる面において島津家に相当な影響力をもっていたということがうかがえる。

（口）大鼓方奥山左近将監督

大鼓方奥山左近将監督は、1584（天正12）年1月頃から約1年間、薩摩に滞在した。このよしみで1600（慶長5）年の関ヶ原合戦の折には薩摩の落人をかくまい、この功のよつて子の藤五郎が家久に召し抱えられたということが「本藩人物誌」に書かれている。

関ヶ原合戦で島津義弘の敗走を助けたのは能役者だけではない。茶人、根来衆らも島津家と古くから付き合いがあった。鉄砲伝来に関して、最近の研究ではポルトガル人が種子島に来たのは、漂着ではなく、目的地として選んで来た、ということがわかっている。その船は西洋船ではなく中国のジャンク船であり、それを操船していたのは王直という倭寇であったといわれる。この時代の倭寇とは、単なる海賊ではなく正確な海の情報をもつ商人でもあった。彼らは命がけでやってくるだけの対価を得るため、鉄砲を再生産できる場所として良質な砂鉄のとれる種子島を選んだのである。鉄砲を作る技術はまたたく間に南九州、堺、根来と、各地に伝わっていった。したがって筆者は、それ以前から種子島（鹿児島）－大阪間の海のルートは確立していたと考える。そして鉄砲伝来後、島津と根来がつながってくる。こういったことから、島津義弘の敗走には、文化を伝えた道の存在が、このとき別の意味で機能したことが理解できよう。

②義久・義弘・家久（忠恒）と能

義久と義弘は兄弟であるが、義久が当主の時代、義弘がナンバー2であったというわけではない。義弘以上に有力な家臣も大勢いた。朱印状によって六十万石が義弘に与えられた事実があっても、鹿児島において当時の家臣たちは、義久が当主のままであるという意識を持っていた。系図では義弘が17代となっているが、当時の人々の間では義久から義弘の子の家久（忠恒）に代は譲られたという感覚だったのである。また、義久は自分の娘を家久（忠恒）夫人にしている。

(イ) 義久

「御文庫四拾八番箱義久公卷中」「家久公御譜中正文御自筆トアリ」

(前略) 又能之具ニと存候て、久敷たしなミヲキ候、もし今後入候事もやと持せ候、能之具ニめしたて候て、をかせらるへく候、わき能ノシテノかり衣ナトニよさうに存候、一王か可存候、今日春山野之馬追仕候、廿五日ニハかならず可罷越候、何事モさしいそかれ可然候する、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長五年」卯月廿二日

龍伯（花押）

又八郎殿

(鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録後編』より)

これは1600（慶長5）年、龍伯（義久）が自分の甥であり娘婿である又八郎（忠恒）に宛てた文書である。幽斎と昵懇な間柄であった義久は、能にも関心があった。この文書には、大事にしていた反物を又八郎にあたえて能の衣装に仕立ててはどうか、という内容が書かれている。ここから、義久は文化的に開けていて、能に対しても理解があったということがわかる。

(ロ) 義弘

「御文庫二番箱義弘公卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

明日平同所へ貴所就御出、中山早右衛門入道可参之由候而、平左衛門尉迄迎船を被指越之間、不及力参上いたさせ候、彼者よひこされ候事者、能を可相企との内存かとかふき申候、其謂者今度圖書殿上洛之儀并船之儀等、其外各油断之躰ニもてなし、于今不相調事曲事之由被仰渡候き、さやう成をたぶらかし、貴所連々數寄之道たるまゝ、能をと申候者飛付やうに可爲御同心候条、幸和久殿こそ逗留候へ、各者由断を不存候へ共、如此能をさせられ、京儀を大事に不被思召故、下々に至り何事も不相調之由、和久殿にもしらせへきの覚悟たるへく候歟、連々申候やうに酒なども久敷候て、長座者無用たるへく候、治定悪敷儀共出合可申候間、我等存る者申請候は、御出候而あるかゝりにもてなされ、酒五返ほど過候者、座を御立候而可然存候、(中略)

かやうに申も別之子細ならず、分別悪敷候へは、當家破滅之儀一定ニ候之故、さてかやうに氣遣申事ニ候、(後略)

(鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録後編』より)

これは1601（慶長6）年12月5日に、義弘が忠恒へ宛てたものである。ここには、忠恒が能を催すかもしれないということに対して、不愉快極まりないという義弘の気持ちが表れている。また「そういう席で長居をしてはいけない、酒を5杯ほど飲んだら帰れ」といったことも書かれている。父親が息子を心配している様子もうかがえる。

また、「かぶく（傾く）」という言葉を使っていることから、義弘は芸能を「まともではない」「日常の世界を超えた」ものと考えており、好意的に見ていないことがわかる。

「御文庫四拾九番箱三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

- 一、有説ニ承付候、去年上洛之時、於御城御能之刻、御前ニて貴所御能ニ心をうつし、居ながら仕舞などをまねられ候もやうを側より見させられ候、大名衆殊外之能數寄ニて候物哉、立而不被舞迄ニて候つるよし、以後ニ物沙汰共候通承付候、多分それ（それ）ニ心をうつし候へハ、何事ニよらす左様ニ在之物ニ候へハ、日来能ニすかれ候まゝ、治定油断ニて御取亂も可被成と存候、是又爲御嗜候、（部分）

（鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録後編』より）

これも1606（慶長11）年2月11日に義弘から忠恒に宛てたものである。これには、京都において能が催されたとき、御前であるにもかかわらず、忠恒が能役者の手振りをまねて、今にも立ち上がらんばかりの様子であった、ということ人を人から聞いた義弘が、それを注意する内容が記されている。

これらから、義弘は、能の嗜みはあるものの、能に執着することに快く思っていないということがいえるのである。

（ハ）家久

家久は前述のようなことから、能を非常に好んでいたといえよう。

これらから見て、能に対する考えは三者三様であった。このことは薩摩藩にとってはよかったのではないかと筆者は考える。義弘のように硬いことばかりを言っていれば、大名同士の社交もうまくゆかないであろう。時には能や酒を嗜むこともあったから、後の薩摩藩があったのではなかろうか。

2. 中西長門の登用と伊勢貞昌の故実伝授

中西長門は1602（慶長8）年、島津家に召し抱えられた。鹿児島に入ったのは1603（慶長8）年頃であった。

①中西長門と伊勢貞昌

(イ) 中西長門

1576（天正4）年、京都生れ。父宗林は二条家・近衛家に仕える。母は足利義昭の家臣中西晴秀の娘。12歳の時、関白豊臣秀次に仕官。近江國小幡村、丹後国保津村を領し、小幡を称す。17歳の時、秀次の罪（好色の密事とされるが、詳細は不明）を一身に受けて町人となり、京都上立売通室町で「虎屋」と号して呉服商を営む。その一方で金春流の手猿楽の名手で本願寺の坊官であった下間少進に能を習った。のちに島津家に仕え、1850（慶安3）年鹿児島で亡くなった。

(ロ) 伊勢貞昌

1570（元亀元）年生れ。島津家家老、伊勢貞真の次男。伊勢氏は本来室町幕府の有職故実を担当した家で、当時本流は絶え、伊勢氏支流の伊勢貞知（如雲）が近衛家に仕えていたが、家系を残すため近衛家の斡旋により、有川貞真が薩摩伊勢家を興し、貞昌が有職故実の伝授を受けた。

貞昌は義弘に仕え、1597（慶長12）年頃から1640（寛永17）年の約34年間にわたり、主として江戸家老として家久・光久に仕え、晩年には幕府からも五百俵の扶持米を受けた。1641（寛永18）年に没している。

伊勢貞昌は、義弘、家久、光久の三代にわたって島津家に仕えた重臣であり、江戸時代初期に重要な役割を果たした人物である。薩摩藩における有職故実の始祖といわれ、藩主に対し、城中ではどのような作法でいなければならないか、あるいは京都ではどういった作法を知っていなければならないか等、室内儀礼をはじめとする諸儀礼を教授する立場であった。中西長門を島津家に斡旋したのもこの貞昌である。

伊勢氏本流というのは室町幕府の政所執事として有職故実を司っていた家であるが、室町幕府の没落後、有職の道を正確に伝えていくことが困難になった。この時、貞知（因幡入道如芸）だけが近衛家に仕えて有職故実を伝え、伊勢氏本流の面目を保っていたのである。

薩摩伊勢氏というのは、本来「有川」を称していた島津家の家臣である。貞知の仕えた近衛家は、島津家とも深いつながりがあった。近衛家の斡旋により、途絶えてしまいそうな伊勢氏を、島津家中に再興させたいという希望を持って、貞真が伊勢氏を名乗ることになる。そして貞昌に伊勢氏の故実が伝えられたのである。

島津家初代忠久の頃から、島津家と近衛家は深い関係にあった。もともと忠久は近衛家の家門であり、その頃は惟宗と称する。近衛家の侍でありながら、鎌倉幕府の御家人でもあった人物である。

忠久は、頼朝の命で南九州にあった日本において最大級の荘園（島津庄）の役人になり、

その莊園の名から「島津」を名乗ることとなった。つまり惟宗忠久が島津庄の役人になったことが、島津姓のはじまりなのである。したがって近衛家、島津家、伊勢家には深いつながりがあり、先きに述べた事情から室町幕府の儀礼を薩摩伊勢氏が引き受ける形になったのである。

伊勢貞知から貞昌に伝えられた有職故実の内容は、料理、鷹飼、女房方故実、弓矢、元服、武具、狩、乗馬、正月儀礼、将軍御成、婚礼、殿中儀礼、書札儀礼等である。

江戸時代になると、島津氏の斡旋で徳川幕府の旗本の中に伊勢流を継ぐ伊勢家を興すこととなる。伊勢氏本流の貞衡の養子として島津光久の子である久達を迎え、旗本の伊勢家をたて、この家が徳川幕府の諸儀礼を司るようになった。

近衛家の斡旋で、室町幕府の有職故実を伝えた伊勢如芸から薩摩伊勢家に受け継がれた諸儀礼が、さらに島津家をとおして幕府旗本伊勢家に継承されたのである。今日のこされている伊勢流の武家儀礼というのは、旗本伊勢家の伊勢貞丈が書いたものである。

また島津家は室町時代からの儀礼のほか、鎌倉時代の儀礼も伝えた。鎌倉にある源頼朝の墓は、江戸時代中期に島津家が再整備し、以降、近年まで島津家が所有していた。江戸時代、島津家は頼朝の直系であると考えられており、鎌倉・室町幕府の諸儀礼、芸能、文化等は島津家を介して将軍家に伝えられていったのである。

②大草流送伝の流れ

大草流とは、室町時代足利将軍家に伝えられた包丁人大草公次を祖とする料理の一派で、進士流・四条流と並び称された。島津家の包丁人となった石原佐渡が大草氏から料理故実を習得し、島津義弘に見出されて1615（元和元）年薩摩に下った。その少し前には、伊勢貞昌が大草三郎左衛門尉から式三献以下大草流を伝授されたといわれている。江戸時代になると、伊勢氏本流から伝えられる大草流が最も格上とされ、光久の命で、伊勢貞衡の伝えた大草流の伝授を薩摩が受けた。

3. 禁中能大夫としての中西長門

中西長門は優秀な手猿楽者であった。手猿楽者はプロの能役者ではない。室町時代には幕府の後援を受けた技量の優れた素人の芸能者集団を手猿楽という。

有名な手猿楽集団に渋谷、虎屋等がある。中西長門は虎屋一派の人物で、朝廷で能を演じる役者である。観世・宝生・金春・金剛は幕府の庇護を受けるが、禁中で能を演じることはなかった。

1600（慶長5）年3月7日に禁中で能11番、翌日「後朝の能」を演じた。禁中では二日にわたって能を演じるが、二日目の能のことを「後朝の能」という。いずれも朝10時頃か

ら日暮れ前まで演じられた。中西長門は1602（慶長7）年、高三百石で島津家に召し抱えられることになる。その後1604（慶長9）年、長門掾に任じられ、同日長門守に任じられた。こういった例は珍しい。

長門守に任じられた時、「翁」を演じた。「翁」というのは非常に格式の高い能であり、それを朝廷で演じるということは、能役者として優秀であったということである。

1604（慶長9）年から1613（慶長18）年まで、京都の記録に中西長門は出てこないが、この間は鹿児島に来ていたのである。1614（慶長19）年には、4年がかりで修理した京都御所の落成祝いの大きな能興行があり、そこで演能した。

政治の中心はこの頃まだ京都にあって、関ヶ原合戦から15年も経たない混沌とした状況下において朝廷に能を演じて見せたのが中西長門である。

貴札辱致拝見候、然者虎屋弥九郎所せはく御座候間、近所之妙顯寺ニ被成御座御内衆ハ
今のことくニ可被召置旨奉得其意候、指合申儀無之候ハ、右之所ニ可被成御坐候、将又
帷子五ノ内単物式ツ被懸御意、忝存候、恐惶

水野河内守

「朱カキ」

守信（花押）

「元和五年」

五月廿六日

渡邊筑紫守

勝（花押）

日下部五郎

宗好（花押）

薩摩守様

尊報

（鹿児島県維新史料編さん所編『旧記雑録後編』より）

これは1619（元和5）年に、大阪町奉行から家久に宛てられたものである。この文書から中西長門が薩摩に召し抱えられつつ、まだ京都にも生活の場をもっていたということがわかる。ここには、島津家久が上洛の折に中西長門の京都の屋敷（虎屋）に泊まっており、それでは狭いだろうから、妙顯寺を宿舎に使ってもよい、という町奉行からの達しが記されている。このようなことから、中西長門は京都において多方面で強い影響力を持ち、京都の宮中、上級貴族、また町衆などに広い知己を持っており、あらゆる面で情報収集能力に長けた人物であったのである。これこそが、中西長門という能役者が、家久に千石という石高で召し抱えられた理由であると考ええる。

4. 島津家と諸儀礼

まず、歴代将軍の御台所に関して、3代将軍以降、御台所として迎えられたのは、ほとんどが摂政、関白になることのできる上級貴族の娘、あるいは宮家の王女、天皇家の皇女である。そんななか例外的に、大名家から御台所に上がった二人が、島津家出身なのである。

そのきっかけをつくったのは、5代将軍徳川綱吉の養女であり、8代将軍徳川吉宗の時代に島津家に入興された竹姫である。これは当初、島津家にとっては、名誉なことではあってもあまりありがたい話ではなかったかもしれない。竹姫を迎えるにあたって、島津家は江戸上屋敷の隣に御守殿という広大な屋敷を新築し、姫に付き従う多くの女中を長年にわたって養うこととなり、大変な負担となるからである。しかし結局、将来の島津家のためにはよいことであろうと、竹姫が島津家に興入れすることとなった。そしてこのことによって、島津家と幕府のつながりが強まったのである。結果、11代将軍徳川家斉の御台所茂姫（広大院）と13代将軍徳川家定の御台所篤姫（天璋院）の二人が島津家から迎えられた。尚古集成館で所有している有職雛は、竹姫がもってきたものであり、三葉葵の紋と牡丹紋が入っている。なお、大揃いの雛道具というのは、嫁入りの際にもってきたものの目録としての役割も果たした。

江戸城本丸は、表、中奥、大奥という三つの区域（機能）から成っている。中奥の将軍居室に入ることのできる人はごく限られる。大名が居室にまで入ることはまずなく、廊下の端で会釈する程度のことであるが、そういうときには厳しい作法が要求される。

城中では単純な立ち居振る舞いにも相当に厳密な定めがあり、予行演習までおこなわれていた。また四季折々の定めもあり、日常から心得ていなければいけないものではなかった。

こうした立ち居振る舞いを含む諸儀礼が武家故実であり、大名にとっては重要な教養のひとつであった。

薩摩島津家が多く危機をのりこえ家を保ち得たのは、単に武力によるものではなく、有職故実等の文化や芸能を理解し、またそれらを当時の政治のなかに利用してきたという視点も重要ではないかと考えている。

（2006年12月9日、生活美学研究所本年度第6回定例研究会における講演に基づく）